様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７１７１

研究課題名（和文）文学からジャーナリズムへ―H・v・クライストの公共圏構想

研究課題名（英文）Literary Journalism. Heinrich von Kleist's Concept of the Public Sphere

研究代表者
西尾　宇広（NISHIO, Takahiro）

慶應義塾大学・商学部（日吉）・講師

研究者番号：７０７８１９６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：プロイセンの作家H・v・クライストの日刊紙『ベルリン夕刊新聞』（1810/11）における「公共圏」構想の意義を、歴史的・現在的な視点から明らかにした。虚実入り混じるその報道は、理性的な熟議と世論形成をめざす啓蒙主義的な言論活動からは明らかに逸脱しているが、同時にそこではしばしば報道内容の真実性が強調され、この新聞を多様な意見のためのフォーラムとして供する編集者の身ぶりも確認できる。『ベルリン夕刊新聞』は、18世紀の「市民的公共圏」の理念に対して両義的な位置に立つが、規範の形成と攪乱というその傾向がまさしく近代の新聞の二つの側面を体現している点で、近代ジャーナリズムの範例的な事例をなしている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to evaluate the daily newspaper "Evening Paper of Berlin (Berliner Abendblaetter)" (1810/11) by the Prussian writer and journalist, Heinrich von Kleist, in the historical and actual contexts of the public sphere. The news in the paper contains both truths and lies, which is clearly in conflict with the principles of the enlightened journalism that aims for a reasonable deliberation and for making a public opinion. On the other hand, it is also insisted by the publisher that what he reports is always "true" and indicated that his paper serves the public as a forum for various opinions. The "Evening Paper of Berlin" is very ambivalent about the idea of the "bourgeois public sphere" in the sense of Juergen Habermas, but at the same time it can be also a representative example of the modern journalism because its opposite tendencies to construct and destruct a normative order are corresponding to the two roles attributed to the modern newspapers.

研究分野：近代ドイツ文学

キーワード：ハインリヒ・フォン・クライスト　ユルゲン・ハーバーマス　公共圏　ジャーナリズム　ドイツ文学

１．研究開始当初の背景

（1）西洋の文化史・社会史において、文学市場の急激な拡大とそれに伴う読者人口の大幅な増大とによって特徴づけられる 18 世紀は、多様な言説が書物という形式をとって広範な人々のあいだに流通し、そこから集合的な気分や意見が大規模に醸成されていく可能性が開花したという点で、まさしく現代の情報化社会の前段ともいうべき革命的変化（「読書革命」）を経験した時代だった。こうして成立した新たな社会空間の総体を「市民的公共圏（bürgerliche Öffentlichkeit）」と呼び、その歴史的変遷を跡づけたのが、ドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバーマス（*1929）の主著『公共圏の構造転換』(1962) である。ハーバーマスの診断によれば、文学や芸術にかんする議論が交わされる「文芸的公共圏」から、やがて政治的な「世論（öffentliche Meinung)」を形成する「政治的公共圏」が発展し、さらに、そうした啓蒙主義時代の「文化を論議する公衆」が、19 世紀の資本主義の進展に伴って「文化を消費する公衆」へと変容・凋落したことで、かつての公共圏の批判的機能は失われていったとされている。ただし、啓蒙主義の規範的言説に依拠する形で理想化されたハーバーマスの「市民的公共圏」概念とその歴史的展望に対しては、すでに多分野の研究者たちによって少なからぬ批判的検証が加えられてきた［Calhoun 1992; Gestrich 2006 など］。

（2）このような研究史を背景として、とりわけ 1980 年代以降になると、文学研究の分野においても 18 世紀の多くの作家や文学作品が同時代の「公共圏」との関連で論じられるようになるが［Bürger u. a. 1980 など］、そうした流れのなか、この文脈からはことごとく取りこぼされてきた重要な文筆家の一人が、プロイセン人作家ハインリヒ・フォン・クライスト（1777-1811）である。古典主義やロマン主義といった同時代のいかなる文学・思想潮流にも完全に合流することがなく、ドイツ文学史においては孤立した例外的な事例として取り扱われ、またそれゆえに不動の地位を確立してもいるクライストは、長らく同時代の公共圏との関係は希薄な作家とみなされてきた。しかし、研究代表者のこれまでの研究によって、「世論」に対する両義的な評価軸の主題化をはじめ、クライスト文学には同時代の政治的公共圏をめぐる問題の諸相が集約的に表現されていることが明らかになっている。こうしたクライストの文学テクストにかんする研究成果をさらに発展させるため、彼が最晩年に刊行した日刊紙『ベルリン夕刊新聞（Berliner Abendblätter)』(1810/11) の分析をおこない、クライストのジャーナリズム活動の全貌を解明することが、本研究を貫く根本的な動機であった。

２．研究の目的

（1）大きな展望として、従来の公共圏論をドイツ文学研究の立場から補完することをめざす本研究が、とりわけクライストの『ベルリン夕刊新聞』に着目した理由は二つある。

① 第一に、青年期に啓蒙主義からの強い影響を受け、のちにその思想的遺産への批判的な取り組みを通して自身の哲学的・政治的立場を確立していったクライストは［Mehigan 2000］、ハーバーマスの議論を批判的に再検討するための最良の観測点であると同時に、ハーバーマス以後の公共圏論の空白を埋め、当時の文芸的・政治的公共圏の新たな側面を発掘するための必須の参照点でもある。

② 第二に、クライストが発行者・編集者・寄稿者の三役を兼務し、日曜を除く毎週日の夕刻に 4 頁刷りの小冊子の形で刊行された『ベルリン夕刊新聞』は、ドイツ語圏における日刊紙の比較的初期の事例として歴史的な重要性を有している。さらに、そこに掲載された雑多な種類のテクスト群（警察報道、小論文、劇評、逸話、物語など）のあいだに複雑な相互連関のネットワークを張り巡らせることで、購読者の主体的な読解を促すと同時にそれを撹乱するこの新聞の特異なコミュニケーション戦略は、文学的・社会学的観点からも注目に値する。

（2）以上のような見通しのもと、『ベルリン夕刊新聞』というジャーナリズム活動の総体を、近代ジャーナリズム史の文脈および同時代の他のジャーナルや文化的・政治的言説との関連において考察し、その歴史的意義を明らかにすること、そしてそれによって、従来の公共圏論においては看過されてきた 1800 年頃の公共圏構想のオルタナティヴな可能性に光をあてることが、本研究の目的であった。

３．研究の方法

（1）まずは、『ベルリン夕刊新聞』に掲載された総計 838 本のテクストの通読によって、この新聞事業の全体像を把握し、そのうえでいくつかのポイントに絞り、関連するテクストの精読およびその相互関係の分析をおこなった。その際、クライストのベルリン＝ブランデンブルク版校訂版全集（第Ⅱ/7・8 巻）の注釈や関連資料を参照したほか、クライスト研究の分野においてとりわけ 1970 年代以降に活発化する『ベルリン夕刊新聞』にかんする先行研究を調査し、時代毎に変遷する研究動向に対して本研究の位置づけを明確にした（詳しくは「４．研究成果」を参照）。

（2）また、『ベルリン夕刊新聞』が占める同時代的・歴史的な座標軸を査定するため、近代ジャーナリズム史および 1800 年頃（啓蒙主義時代からナポレオン戦争期）にかんする社会史的・文化史的な先行研究も積極的に参照し、当時のジャーナリズムおよび公共圏を

めぐる一般的状況の概観を得た。とりわけクライストのジャーナリズム活動の特質を浮き彫りにするうえで重要な同時代の作家・テクストについては、一次史料の精査も実施した（同じく詳しくは「４．研究成果」を参照）。

４．研究成果

（1）『ベルリン夕刊新聞』というジャーナリズム活動の内在的な論理と戦略性を解明するため、まずは、クライストが人間の「発話」行為について語る際にしばしば用いる「電気」の比喩に着目し、彼のジャーナリズム活動の理論的背景を探った。クライストはいくつかのテクストにおいて、人間の精神的世界を支配している不可視の法則性を、自然界を支配している物理法則との類比によって説明する、同時代の疑似科学的言説に接続しつつ、個人同士の対話のなかに成り立つある種の法則性を「電気」の比喩によって説明しようと試みている。現代の科学的知見からすれば荒唐無稽とも映るこの発想は、しかし、クライストが自身のテクストにおいて企図している言語実践の内実を検討するうえでは、きわめて重要な参照点となる。

クライストの着想の背景をなす 18 世紀は、ベンジャミン・フランクリンによる「避雷針」の実験や「静電誘導」の理論の普及によって、それまで神の力と結びつけて捉えられてきた神学的な「雷」から、人間によって操作可能な「電気」という物理学的現象へと、学問的認識の大きな転換が起こる時代であった。同時に、電流という人間の眼には見えない法則性の発見は、同時代の文学者の詩的な想像力をも刺激し、いわゆる「メスメリズム」や「動物磁気」の言説をはじめ、とりわけロマン主義の作家たちによって、人間の精神的世界に物理的世界と同種の法則性を見出そうとする見方が開拓されていった［Gamper 2009］。

興味深いことに、このような疑似科学的な「電気」をめぐる言説は、同時代の「公共圏」について書かれたテクストのなかにも確認することができる。啓蒙主義の文筆家ヨアヒム・ハインリヒ・カンペ（1746-1818）は、バスティーユの襲撃後のパリを訪れて書いた見聞録『革命期のパリからの手紙』（1790）において、ヴェルサイユの国民議会でなされた迅速かつ熱狂的な議決の様子を「電気」の比喩で語るとともに、パリの街頭に出現した民衆の「公共圏」をも同様の筆致で描き出した。これと類似した描写は、クライストのいくつかの物語作品（『チリの地震』における群集場面と『ミヒャエル・コールハース』における「ビラ」を媒介とした世論誘導）にも見出される。

直接的な対話もしくは文書を介した集合的なコミュニケーション過程を一種の〈感電〉として捉え直すこのような発想を前提とするとき、クライストの『ベルリン夕刊新聞』が二つの意味で「電気」的なメディアであった可能性が浮上してくる。第一に、「電気」はこの新聞における報道の〈速さ〉を表現するための隠喩である。『ベルリン夕刊新聞』は、実際にきわめて迅速な情報伝達を実現するメディアであっただけでなく（たとえばある号では、同日の「午前 10 時」および「午後 2 時」に実施された気球飛行の実験にかんする即日報道がなされている）、「砲弾郵便の構想」と題された記事においては、当時発明されたばかりの「電信」という最新の通信メディアを示唆しつつ、迅速な郵便が「雷鳴」に喩えて語られている。第二に、「電気」はこの新聞の購読者が記事を読む際の受容の〈法則〉を表す公式でもある。クライストは「最新の教育計画」という連載記事において、あたかも帯電物体のあいだに成立する物理法則をなぞるように、人間のコミュニケーションにおいては、発信されたメッセージが発信者の本来の意図とは逆の意味で受容されてしまうとする見解を提示している［Borgards 2005］。これにしたがえば、『ベルリン夕刊新聞』の発行者が、この新聞の伝える内容が真実であると宣言するとき、そこには逆説的に、その記事の真実性を疑うよう読者に要求する潜在的な命法が成立していることになる。

以上の議論によって、従来の研究ではもっぱらクライストにおける〈個人間の直接的な対話〉の法則を表すものとして理解されてきた「電気」の比喩が、文書を介した〈集合的で媒介的なコミュニケーション〉にも適用可能な思考モデルであることが示された。この内容は、2016 年度に学会発表として公表された（「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕④）。

（2）続いて、こうしたクライストのジャーナリズム活動を貫く内在的な論理を「歴史化」するため、より広い文脈での文献調査をおこなった。その際、『ベルリン夕刊新聞』にかんする先行研究を整理する過程で、従来の議論においてはこの新聞に対する二つの評価のあいだでの振幅が見られることが確認された。戦後のクライスト研究において、他の文学テクストに比してほとんど注目されてこなかった『ベルリン夕刊新聞』の再評価が始まるのは 1970 年代のことだが、このときには、クライストが当時の検閲を考慮しつつも、みずからの新聞を社会の多様な意見を媒介して「世論」の形成を促すための言論空間として構想していたとする評価が提出された［Grathoff 1972］。いわば「啓蒙主義的な解放運動の伝統に連なる」メディアとして『ベルリン夕刊新聞』を位置づけるこのような立場に対し、2000 年代に入ると、とりわけ 1980 年代以降に台頭したポスト構造主義の理論的枠組みを用いて、『ベルリン夕刊新聞』の政治的機能を基礎づけている美学的な前提が問題化されるようになり、「啓蒙主義」流の規範的言説を掘り崩すような撹乱的な

言語実践の可能性がこの新聞に読み込まれるようになっていく［Peters 2003］。研究史における評価のこのような二極化傾向は、その実、ハーバーマスの「市民的公共圏」の理念に対する追認と批判を意味しているのだが、クライストのジャーナリズム活動の複雑性と両義性に起因するこの葛藤は、近年の研究においても決して完全に解消されてはいない［Meierhofer 2012; Dubbels 2012］。

『ベルリン夕刊新聞』に見られるこうした一種の矛盾を受けて、その矛盾の歴史的由来を検討するため、近代ジャーナリズムにかんする社会史的・文化史的研究の調査を実施したところ、これが決してクライスト研究特有の現象などではなく、むしろ 17 世紀に近代的な新聞の原型が誕生して以来、ジャーナリズムの歴史そのものに深く刻印されてきた特徴であったことが明らかとなった。新聞の規範的あるいは撹乱的な社会的機能をめぐる評価の振幅は、とりわけ 17 世紀から 18 世紀にかけて、ヨーロッパで発行された定期刊行物の表題などに好んで用いられた二つの神話的形象、すなわち、神々の使者メルクリウスと噂の女神ファマに対応するものとして理解できる。政治的に適切に管理された安定的な情報流通の請負人であった前者に対し、真実の言葉から事実無根の虚偽にいたるまで、あらゆる質の情報を無際限かつ享楽的に拡散する後者は、新聞というメディアがときとして為政者や社会規範にとって大きな脅威となりうるものでもあることを、如実に物語る形象であった［Pompe 2012］。

新聞の理論的言説におけるこのようなメルクリウスとファマの競合関係は、18 世紀の啓蒙主義の時代に入ると、しだいに前者の勝利へと傾いていく。ヴァイマル古典主義を代表する作家クリストフ・マルティン・ヴィーラントがみずからの文芸誌（1773-1789）に『ドイツのメルクリウス』という表題を冠したことは、そのことを表す象徴的現象であり、また、ベルリンの有力紙『フォス新聞』の編集に携わっていた作家カール・フィリップ・モーリッツ（1756-1793）は、その綱領的テクスト『完璧な新聞の理想』（1784）において、日々溢れ返る出来事と情報の洪水のなかから「有益な真実」だけを選び出し、読者に提供する役割を新聞に求めた。

このような前史を背景にふたたびクライストに目を向けるとき、「あらゆる身分の人々にとっての娯楽」と「国事一般の推進」という二つの対照的な目標を掲げていた『ベルリン夕刊新聞』は、まさしくファマとメルクリウスという二つのモデルの混交物として構想されていたことが明らかとなる。先述したように、1970 年代以降の研究では主としてメルクリウスの側面が、2000 年代以降の研究では主としてファマの側面が強調される傾向にあったが、新聞の理論的前提にかんするこの二つのモデルの競合を二者択一的に理解しようとする分析視角からは、『ベルリン夕刊新聞』の歴史的な意義を正当に評価することはできない。そこではたとえば、「警察報道」という本来はメルクリウスが担うべき情報が、同時に読者の「娯楽」にも資するものであることが謳われ、そうかと思えば、この新聞がメルクリウスのメディアであることを高らかに宣言する綱領文「ゾロアスターの祈り」が、公然たる捏造記事として発表される、といった具合に、ファマとメルクリウスという二つのモデルは互いに分かちがたく結びついているのである。しかしこのことは、クライストがジャーナリズムに対して極端に相対主義的な見方をとり、報道されるあらゆる〈事実〉が言説的に構築された〈虚構〉にすぎない、と考えていたことを意味するわけでは決してない。むしろ重要なのは、このような虚実の境がきわめて曖昧な報道の背後で、彼が再三にわたって「誤報」に対する「訂正」記事を執筆している事実だろう。それは、そうした「訂正」の〈内容〉の実際の真偽にかかわらず、この新聞がつねにメルクリウスの〈形式〉を志向し模倣していること、そうして社会に流通するデマを牽制する対抗言説を自称することで、ほかならぬ読者の歓心を買おうと目論むメディアであることを示している。すなわち『ベルリン夕刊新聞』の編集手法の核心は、メルクリウスの背後に隠れているファマではなく、ファマを撲滅しようとするメルクリウス（の身ぶり）なのである。

以上の議論から、一見逸脱的とも映るクライストの両義的なジャーナリズム活動が、近代ジャーナリズムに胚胎する問題系を集約的に引き受けた、一つの範例的な事例として評価できるものであることが示された。この内容は、2017 年度に雑誌論文の形で発表された（「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕①）。

（3）狭義のジャーナリズム活動にかんする

以上の成果のほかに、とくに 2017 年度はクライストにおける「公共圏」の主題をより広い文脈で問い直すことを目的とする学会発表を、計三回おこなった。

「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕③では、クライストの文学テクストに現れる〈君主〉の形象の意味を、1800 年頃の歴史的文脈に即して検討した。近年の研究では、フランス革命後の混乱期に新たに台頭した〈群集〉という政治的行為者に対する一種の対抗的形象として、〈君主〉をはじめとする「偉大な男」の形象が要請されたことが指摘されている［Gamper 2016］。こうした見通しはひとまずクライストにも当てはまるものだが、ただし、クライスト文学において特徴的なのは、後期の作品になるにしたがって〈君主〉を描くことの困難がしだいに顕在化していく点である。

中期作品の『チリの地震』（1807/10）や『ノルマン人の王ロベール・ギスカール』（1808）

では、すでに作中で〈君主〉の死が示唆されていたのに対し、後期の『ミヒャエル・コールハース』（1810）や『フリードリヒ・フォン・ホンブルク公子』（1810/11）になると、一見したところ力強い〈君主〉像が復活しているようにも見える。古典的な作劇法における「機械仕掛けの神」さながらに、物語の筋に劇的な解決をもたらすその〈君主〉は、同時にまた、国家を一つの家族とみなして国王に父の役割を求める「国父イデオロギー」の伝統に倣って、作中では臣下から「父」と呼ばれており、いわば「機械仕掛けの神」ならぬ〈機械仕掛けの国父〉の様相を呈している。しかし、その形象は、もはや現実世界に何らかの参照先を持つ実体的な存在ではなく、作中での言説や衣裳を媒介してメディア的に構築された一つのイメージでしかない。後期作品に現れるこの〈君主〉は、現実の君主制のあり方をめぐる作者の願望や思考実験を示唆するかつてのような記号ではなく、物語を駆動するための一種の詩学的装置にすぎないのである。クライスト研究において一般にほとんど注目されることのない〈君主〉という主題について、いくつかの作品を横断的・時系列的に検討しながら、クライスト文学全体におけるその位置価値を見定め、クライスト文学に通底する政治的・詩的文法を明らかにした点に、本研究の意義が認められよう。

一方、このような〈君主〉の後退に呼応する形で、クライスト文学においてはむしろ〈群集〉の形象が前景化することになる。とりわけ『チリの地震』を例に、その形象に対する解釈可能性の広がりを検討し、同時に、クライストの〈群集〉描写の特質を同時代の他の作家との比較において明らかにしたのが、「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕②である。

20 世紀後半から現在にいたるまでの『チリの地震』の研究史においては、たびたび〈群集〉という主題が取り上げられ、その解釈は、研究者自身が身を置くそのつどの政治的・歴史的状況と密接に結びつく形でなされてきた。それは、第二次世界大戦後のドイツ文学研究全体が辿った趨勢を端的に示すものとなっている。他方、クライストの〈群集〉描写を 1800 年頃の同時代の文脈において検討すると、その独自性が浮かび上がってくる。たとえば『イタリア紀行』（1816/17）所収の「ローマのカーニヴァル」（初出 1788 年）において、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832）はカーニヴァルに集うローマの〈群集〉をその外部から冷静に観察しようとしたが、対するクライストは物語技法の水準において、「物語の時間」と「物語られた時間」を一致させて語り手自身を群集場面の渦中へと導き入れ、その内部で飛び交う言葉の応酬とそこで作動する内在的な論理を可視化しようと試みた。それは、のちの解釈史が典型的に示しているような、〈群集〉という対象の両義性それ自体を表現するために考案された、歴史的に見て新しい文学的形式だったと評価できる。

「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕①では、すでに（2）で言及したファマとメルクリウスにかんする主題を、「政治的な嘘」をめぐる哲学的な問題系に接続させて、主にクライストの文学テクストを例に検討した。哲学者ハンナ・アレント（1906-1975）は、「真理と政治」（1967）や「政治における嘘」（1971）といった論文において、彼女の政治哲学において重要な位置を占める「活動（action）」と「嘘」の隣接性を認めている。「嘘」は「活動」と同じく、既存の現実に新たな局面を切り拓く「始まり」の契機となりうるからである。同時に彼女は、秘密の「隠蔽」を目的とする「伝統的な嘘」と、事実の「破壊」をめざす「近代的な嘘」を区別した。このような問題枠組みのもと、アレント自身は「事実の真理」という、「嘘」によって「破壊」されてはならない水準にある「真理」を（やや素朴に）措定し、同時代のアメリカにおける「政治的な嘘」を批判しているが、彼女の設定した問題領域の重要性は、現在の国内外の政治的状況に照らしてもいささかも減じてはいない。

本研究ではこうした理論的知見を踏まえたうえで、主にクライストの戯曲『ヘルマンの戦い』（1808 年成立）を例に、1800 年頃にすでに「近代的な嘘」の原型が見られることを論じた。ゲルマン人がローマ軍の侵略を退けた歴史的な戦争（紀元 9 年）に取材したこの作品では、主人公のヘルマンが嘘と策謀を駆使してゲルマン人の各部族の連帯と動員を実現し、戦争を勝利に導く過程が描かれている。その排外主義的なナショナリズムの露骨な表現ゆえに、戦後のクライスト研究においては長らく等閑に付されてきたこの作品は、しかし、その構成上必然的に、ヘルマンの巡らす策略の内幕が観客にはすべて暴露されることになり、作用美学的な観点から見れば、国粋主義的な煽動というよりもむしろ、現実の政治がいかに「嘘」に立脚して構築されているものであるかを観客に再考させる多くの契機を孕んでいる。こうした議論を国際学会の場で海外の研究者と共有し、肯定的な評価と批判的な示唆を得られたことは、今後の論文化の作業のためのきわめて意義深い収穫となった。

以上の三つの研究成果は、先述のように、本研究が主題とするクライストのジャーナリズム活動に必ずしも直接的に関連するものではない。しかし、この一連の研究を通じて、『ベルリン夕刊新聞』で示唆されるクライストの公共圏構想と、彼の文学的テクストにおいて描かれる〈暫定的な政治的秩序〉との関連性の一端が明らかとなり、これまでの研究成果を一冊の研究書の形にまとめて発表するための具体的な展望が得られたことは、大きな成果であったといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 西尾 宇広、ファマとメルクリウス ― ジャーナリズムの歴史から見たクライスト『ベルリン夕刊新聞』の位置、研究年報、査読無、35 号、2018、40-69
http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10067705X-20180331-0040

〔学会発表〕（計４件）
① NISHIO, Takahiro, Lügen in der Öffentlichkeit. Zum Stellenwert der falschen Angaben bei Heinrich von Kleist, Internationales Kolloquium „Poesie und Philosophie in Deutschland um 1800 und die Rezeption in der Gegenwartsliteratur. Ein Gespräch zwischen den Philosophen und Literaturwissenschaftlern“ (Waseda Universität, Tokyo, 27.-29.03.2018)

② 西尾 宇広、〈群集〉の読み方 ― クライスト『チリの地震』の解釈史を手がかりに、早稲田ドイツ語学・文学会第 25 回研究発表会（早稲田大学）、2017

③ 西尾 宇広、機械仕掛けの国父 ― クライストにおける〈君主〉の形象、日本独文学会春季研究発表会（日本大学）、2017

④ 西尾 宇広、電気と言論 ― クライストにおけるジャーナリズムの詩学、第 49 回ゲーテ自然科学の集い（慶應義塾大学）、2016

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
西尾 宇広 （NISHIO, Takahiro）
慶應義塾大学・商学部・専任講師
研究者番号：７０７８１９６２

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）